「正信偈」について（第十九回）

正信偈の教え 下　古田和弘、正信偈のこころ限りなきいのちの詩　戸次公正、等による

源信広開一代教
げんしんこうかいいちだいきょう

偏帰安養勧一切
へんきあんにょうかんいっさい

専雑執心判浅深
せんぞうしゅうしんはんせんじん

報化二土正弁立
ほうけにどしょうべんりゅう

極重悪人唯称仏
ごくじゅうあくにんゆいしょうぶ

我亦在彼摂取中
がやくざいひせっしゅちゅう

煩悩障眼雖不見
ぼんのうしょうげんすいふけん

大悲無倦常照我
だいひむけんじょうしょうが

源信、広く一代の教を開きて、
ひとえに安養に帰して、一切を勧む。

専雑の執心、浅深を判じて、
報化二土、正しく弁立せり。

極重の悪人は、ただ仏を称すべし。
我また、かの摂取の中にあれども、

煩悩、眼を障えて見たてまつらず
といえども、

大悲倦きことなく、常に我を照ら
したもう、といえり。

［意訳］

源信僧都は、釈尊一代の教えを広く開いて、みずからひとえに弥陀の浄土に帰依し、また一切の人びとにも勧められた。

専修念仏と雑修との執持の心の浅い深いを判別して、報土と化土とをはっきりと区別された。

極重の悪人は、ただ阿弥陀仏の名号を称えるべきである。私もまた、弥陀の本願の中に摂め取られているのだけれども、煩悩が眼をさえぎ

って、私には見えてない。けれども、大悲はあきることなく、常にわたしを照らしてくださる、と教えられた。

源信僧都は、釈尊がご生涯(ご一代)に説かれた教え、すなわち仏教の真髄を、広く世間に示され、自らも念仏に深く帰依され、人々にも本願による念仏をいただくように勧められた。

専ら弥陀の本願に素直に順って一途に念仏を称える他力の信心は極めて深い。また、念仏より自らの努力を信頼して、様々な修行を雑ぜあわせて励んで往生を期待する信心は、浅はかであると、きっぱりと判別された。自力から離れられずにいる雑心の凡夫を本願他力を信ずる専心によってしか往生できない真実の「報土」にやがて導くために、仮に方便として化現されている「化土」を区別して明らかにされた。

阿弥陀仏からすでに専修念仏が与えられているにもかかわらず、それを無視して自分の思いを優先させ、あえて雑修に心を向けてしまうような「極重悪人」はただただ念仏を称えるべきです。

源信僧都は、私も亦、阿弥陀仏の本願のなかにしっかりと摂め取られているという事実にもかかわらず、絶え間なくはたらき出す煩悩、自我へのこだわりが、心の眼を覆い尽くしていて、摂め取って捨てられることのない本願の事実を自分自身で見えなくしてしまっている、と言っておられるのです。ところが、それでもなお、阿弥陀仏の大悲の光明、大いなる哀れみのお心は、あきらめることなく、常にご自分を照らして護って下さっていることに、感激しておられるのです。

源信僧都は、摂取のなかに身をおいているという事実と、その事実を見たてまつっていないという現実と、この食い違いを直視なさっているのです。そして、この食い違いを、凡夫の常識を超えたところで解消している不可思議なはたらきこそが、阿弥陀仏の大悲であると受けとめておられるのです。

合掌